

〈目次〉

要旨	(v)
南方熊楠略年譜	(ix)
南方熊楠の生涯	(x)
各章ごとの関連図	(xv)
凡例	(xvi)
序章	(1)
第1節, 目的	(2)
第2節, 先行研究	(7)
第3節, 研究の方法	(9)
第4節, 本稿の構成	(13)
第1章 夢の記述、その方法と経緯	(21)
第1節, 夢を記録し、考察すること	(22)
第2節, 夢の思い出し方	(24)
第3節, 夢と現実の境	(28)
第4節, 熊楠に見る「無」と「不安」について	(32)
第5節, 日記における夢の記述の変遷	(34)
第2章 熊楠と羽山兄弟—intimate な関係—	(37)
第1節, 羽山兄弟の夢で始まり、羽山兄弟の夢で終わる日記	(38)
第2節, 羽山兄弟とは—「アニマ」の投影—	(40)
第3節, 「intimate」な関係—深友としての羽山兄弟—	(44)
第4節, 失われた「片割れ」を求めて	(48)
第5節, その他、日記に見る羽山兄弟に関する夢の記述	(51)
第6節, 絶対的な片割れの喪失体験	(58)
第7節, エネルギーの源泉	(62)

第3章 「事」としての夢・・・・・・・・・・(65)

第1節, 覚醒時の状況の考察—外的・物的要因— (66)

第2節, 夢と「空間」に関する考察 (69)

2-1, 夢と幽霊の相違 (69)

2-2, 幽霊に関する「近さ」と「遠さ」 (72)

第3節, 夢の出所の考察—内的・心的要因— (74)

第4節, 「事の学」への昇華 (77)

4-1, 「事」、「心」、「物」 (77)

4-2, 「物」と「心」—誘発するものと誘発されるものとの関係— (79)

第5節, 夢の原因を探る 1 (81)

5-1, 1894年—覚醒時の状況と心に留まった想い— (81)、5-2, 1903年—幽冥に関する問答他— (83)、5-3, 1904年—連想に次ぐ連想— (89)、5-4, 1907年—亡父・母・妹— (91)、5-5, 1908年—松枝の夢— (93)、5-6, 1910年—本・雑誌からの影響— (94)、5-7, 1911年—ロンドン時代の夢／雷様の原因— (96)、5-8, 1912年—飛翔の夢他— (97)、5-9, 1913年—大山神社合祀遺憾の念／『大英類典』の影響— (103)

第6節, 小括 (106)

第7節, 夢の原因を探る 2 (108)

7-1, 1914年—足への影響が及ぼす夢他— (108)、7-2, 1915年—平瀬作五郎— (111)、7-3, 1916年—夢の原因についての「関係図」— (112)、7-4, 1917年—刹那に見る夢— (114)、7-5, 1918年—心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん— (115)、7-6, 1919年—錯綜する夢— (117)、7-7, 1920年—松枝が死ぬ? 夢— (119)、7-8, 1921年—川根米— (121)、7-9, 1922年—夢の中で学ぶ— (122)、7-10, 1923年—風呂と亀— (124)、7-11, 1924年—ロンドンの少年— (126)、7-12, 1925年—夢を見ない日々— (127)、7-13, 1941年—晩年における考察— (128)

第8節, 見えてくる事 (129)

第9節, 「中性者」になり得なかった熊楠 (130)

第4章 夢と「やりあて」・・・・・・・・・・(135)

第1節, 「やりあて」とは (136)

1-1, 「やりあて」の語源と定義 (136)
1-2, 「やりあて」と tact (141)
第2節, 熟練能的 tact による「やりあて」—生物の発見を中心に— (145)
第3節, ウチワカズラの発見 (やりあて) (152)
第4節, 主客合一による「やりあて」 (155)
第5節, ひきつける要素あるいは親和性 (158)
第6節, 熊楠の挙げる「やりあて」の事例 (161)
第7節, 発見的創造と芸術的創造 (164)
第8節, ひらめきと創造的活動 (165)
第9節, 記述の相違 (166)
第10節, 熟練能的 tact による「やりあて」の他の事例 (171)
第11節, 生得的 tact による「やりあて」—身近な人の死を予知する— (173)
第12節, 夢・幻・幽霊 (174)
第13節, 死の予知夢 (177)
13-1, 事例①—宇治田虎之助の戦死— (177)
13-2, 事例②—目良三柳の長男の病死— (178)
13-3, 事例③—羽山芳樹の病死— (179)
第14節, telepathy への関心、マイヤーズへの傾倒 (182)
第15節, 密かなる「やりあて」の実験 (194)
第16節, 何が「死の予知」を可能にするのか (199)
16-1, C.G.ユングの「共時性」の概念を手掛かりに (199)
16-2, rapport について (202)
第17節, 娘・文枝の話より (207)
第18節, 資料 『ヒューマン・パーソナリティー』に言及した論考 (211)

第5章 熊楠の採集・観察行為・・・・・・・・・・ (235)

第1節, 熊楠にとっての「採集 (収集)」と「観察 (写生・記録)」の意味 (236)
第2節, 「取り入れ同一化」としての「採集」、「投影同一化」としての「観察」 (239)
第3節, 熊楠が粘菌に見出していたもの (243)

第4節, 統一と分裂 (245)

第5節, 近さと遠さ (248)

第6章 「大不思議」—根源的な場をめぐって— (257)

第1節, 「大不思議」を論じる理由 (258)

第2節, 「南方曼陀羅」の概要 (260)

第3節, 統合失調症者のいる場所 (264)

第4節, 「大不思議」と「理不思議」の関係 (267)

第5節, なぜ「分離」するのか (270)

第6節, 熊楠が「大不思議」を構想し得た理由 (272)

第7節, 熊楠は、なぜ自己を保持できたのか (276)

第8節, フロイトの「死の欲動」論から (277)

第9節, 「根源的な場」への問いの発生 (279)

終章 「中間」と〈中間〉—熊楠のポジションについて— (283)

補遺, 臨終の夢 (299)

データベース使用例 (305)

データベース資料 (310)

1, 「日記1」 (310)

2, 「日記2」 (319)

3, 「書簡」 (328)

4, 「論考」 (333)

参考文献一覧 (343)

あとがき・謝辞 (349)

付録 CD-R データベース資料